

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

私が私らしくあるために

横浜市立上永谷中学校 2年 ^{さいとう} 齊藤 ^{かん な} 葉菜

私は、小学校4年生の時から保健室登校するようになりました。緊張や不安が強く、思うような学校生活を送れないことに劣等感や苛立ちを感じていました。

そのまま小学校を卒業し、私は中学生になりました。最初は少しでも長く学校にいる時間が増えるように学習室で勉強などをしていましたが、心身が追いついていかず、次第に行くことができなくなりました。

週3日、授業中誰にも会わないようにこそこそと職員室に顔を出し、提出物を受け取り帰る。家では趣味に浸り勉強もしない。そんな生活が続きました。

自堕落な生活を送り続け、1年が経ちました。

2年生になり担任の先生が変わりました。今年の担任は、1年生の時にも関わりがあった男の先生でした。

「担任ガチャ、外れたかな。」

そう思いました。

週3日間少しの間しか学校にいない私にとって、1年生の時の担任の先生以外は外れか大外れだけだったので。

始業式が終わって少し経った頃、先生から1冊のノートを渡されました。どうやらクラスの全員と交換ノートをするようで、それを私にも渡してきたようです。

「どーせ、いないも同然なのに。教師も大変だな。」

この頃の私は少し捻くれていました。

自分の事を棚に上げ、前を向かず目を背ける。学校に行かないことが普通になってしまった私は変わっていくことが怖くて、その為自分からはアクションをあまり起こしませんでした。この普通を、壊したくありませんでした。

交換ノートが少し続いた頃、個性の話になりました。

そこで先生は「ルールを守らず個性を生かしてくれ。」という人達がいるということを書いていました。

私は当時ハマっていたゲームなどにそれを当てはめ、自分の考えを書きました。

個性を殺すような規則は、多少緩くても良いと思うこと。

けれど、TPOなどを弁えないで個性ばかりに目を向けるのは人を不快にさせること。

現在の日本で個性を尊重するのは、難しいと思うこと。

規則を守り個性を生かすのがさらに難しいと思うこと。

私は人よりも自由な時間が多く、そういうことを考えさせられる機会もたくさんあったため、ありふれていながらも自分で考えて出した、自分だけの答えを持っていました。その事をノートに書いているうちに、それが自分にも言えることではないかと思えてきました。

学校にもろくに行かず、自堕落な生活を送っていることを個性だとは思いません。私のこれは、ただの惰性です。保守的、依存的な性格も相俟って、その習慣が壊れるのを恐れていることも、個性というには、あまりに消極的で良い印象を持ちません。

ですが、それで良いのです。それを含めて全部、私という人間なのです。

私はそう思いました。

怠惰で保守的で受動的。逆に言えば意思が固く、こうと決めたら何でも動かない。

それが私。そうじゃなければ、私の皮を被った狸です。

今はもう、変わることが怖くありません。まだ皆のいる教室には入れないけれど、それが今の私で私の今です。私はカメのように、他の人達からしたら遅くて苛々するようなスピードでも確実に成長して、変わっていきます。

最初は残念に思っていた先生にも、今ではとても感謝しています。

最後に、私と同じような境遇の中を生きる人達に届くと信じて、言いたいことがあります。

変わることを恐れている人もいるかもしれない。今ある辛い地獄から解放されたくて、死にたい、消えたいと思っている人もいるかもしれない。今の日本は、そういう人達にとって少し生きづらい国だから。

だけどそんなときは、頑張らなくても頑張れなくてもいいから、深呼吸して考えよう。

君が君らしく、私が私らしくこれからの社会を生きるために、どうすれば良いかを。